

最近、「魂」について質問を受ける機会が何度かありました。そこで、筆者が今「魂」について考えていることを、自らの思考を整理しつつ述べてみたいと思います。

「魂」とは何か？一言でいえば、「人間の主体」であります。

A男とB女の間に○男(○女)が産まれるというのは、AとB双方の遺伝情報を受け継いだ新たな情報系が立ち上がるということですが、その両親からの情報の受け手になる主体が○男の「魂」です。また、受精後に誕生する人間の身体は、大人になれば60～70兆の細胞で形成されるようになり、そして、その全ての細胞が7年前後で新しい細胞と入れ替わるといわれます。つまり、現在の自分は、7年前の自分とは“物質的には全く異なる存在”なのです。しかし、細胞が新しくなって自分が7年前とは別人になったかというそうではありません。7年分の歳をとったし見かけもその分変わった。思考や趣向も変わった点があるかもしれないけれども、○男という存在は○男であり△男にはなっていない。周りの人たちも、7年前の○男と同じ人物として認識してくれる。その年限を経て物質的には全く異なる存在を人間としては同じ○男たらしめている。それが、○男の主体たる「魂」なのです。人間の身体を形成する細胞は毎秒500万個ほどが死滅して新しいものと入れ替わるといわれていますが、刻々と入れ替わる細胞が同じ人間○男を形成するのは、その主体・「魂」の設計図があるからなのです。

ある人が、「魂」に実体があるか否かを調べるために、人の臨終直前の体重と臨終直後の体重に差違があるかを調べたそうです。生者から「魂」が抜ければその分の体重が軽くなるだろうというのですが、結果としては変化を捉えられなかったといえます。「魂」は素粒子・原子でできている物質とは違うと思いますから、それは当然の結果でありましょう。「魂」は“意志”とか“思念”という言葉に近い存在で、“ウルTRASーパーカミオカンデ”でもとらえることはできない存在だと思っております。

別の表現で言いますと、「魂」は楽曲のようなものです。たとえば、ベートーベンの交響曲第5番という楽曲を考えますと、その楽曲は音の集合体ではあっても質量のある物体ではありません。音は空気の振動の様々な形態ですが、これが音だと捉えられるものではないのです。たとえば、自分がドレミファソラシドと発声するそれぞれの音は、自分のその音を出そうという意識によって空気に伝えられる振動ですが、ドとかレの形のある音符が口から飛び出していつているのではない。音は空気の振動をもたらす原因であっても、空気の振動が音そのものではない。そのどのような空気の振動・音を発するのかを指示しているのが楽曲・楽想であります。つまり、「魂」とは、人間の身体的表現を引き起こす楽曲・曲想のようなものだと思うわけです。

交響曲第5番は、ベートーベンによって作曲されて以来ずっと存在していますが、しかし、今、この文を記している筆者の周りでは、この楽曲が演奏されていません。ですから、この楽曲は存在しているけれども今は存在していないのと同じです。“第5番”はオーケストラが演奏した時には交響曲だけれども、

誰も演奏していない時には何も聞こえない形のないものなのです。

つまり、交響曲「○男の魂」が交響楽団「○男の身体」によって表現されている間が、○男がこの世に生きている時間なのです。交響曲「○男の魂」が演奏開始されてから終わるまでの間が○男の一生であり、演奏が終わればその魂の活動は停止する。「魂」が前生、今生、来生と生き通しというのは、「○男の交響曲」が時代ごとにその時の交響楽団によって演奏され続けていく。前生、今生、来生の○男の姓名は変わるように、演奏する交響楽団の名前は、たとえば、ベルリン・フィル、ニューヨーク・フィル、東京フィルなどと変わることはあっても、交響曲「○男の魂」の曲想は受け継がれて演奏・表現されていくのです。

(人間の誕生と「魂」については、『みちのとも』平成27年12月号48～55頁を参照してください)

次に、「魂」と似た言葉に「霊」がありますが、筆者は、「霊」は「魂」のこの世に現れていない時期、「魂」が活動していない期間を指す言葉・概念だと考えています。「魂」の働きは現身を通して発露され、その活動を停止すると「霊」状態になる。そして、「霊」を祀るというのは、たとえば○男(○女)の「魂」が「霊」になっている期間を祀る・崇めるのではなく、○男が霊になる前の一生の間に残した功績に対して敬意・感謝を表すことだと思っております。

さらに申せば、「霊」は活動をしていないのですから、霊障などということは起らない。先祖の「霊」が子孫に祟るなどということはできないのです。また、自身でいわゆるいんねんを積むことも、切り替えることも、活動が停止している「霊」の間には起りえないと思うのであります。

しかるに一方、筆者には、三十数年前に遭遇したある霊的(?)な体験があります。日本から30時間かけてブラジルの田舎の信者宅を訪れた時のこと。その家の奥さんが久方ぶりの再会の挨拶もそこそこに、「先生、N君は元気ですか?」と尋ねるのです。10年以上前に修養科を一緒に出て以来音信不通だったN君が、3日前から繰り返し彼女の夢枕に立って、「おばさん、僕ブラジルに行きたい」と何度も言ったというのです。そのN君の出直し・自死の報を聞いたのが、筆者が日本を出立する空港でのこと。当時やっとな電気がついたという程度で、電話回線もないブラジルの奥地。手紙の配達も十数キロ離れた国道筋にまで出て行かないと受け取れない環境ですから、N君出直しの報が筆者の到着以前に現地に届くことは絶対にあり得ない。その状況下で、彼女も全くその存在を忘れていたN君が夢に現れた。こういう出来事は「霊」云々の話なのか、そうでないのか、そういう事象に関しては、まだまだ思案せねばならないと考えています。

また、「魂」について語る時にさらに大事なものは、「人間創造の母胎としての魂」である教祖のお魂、「魂は永久に元のやしきに留まる」といわれる存命の理の教祖のお魂についての受け止め方・理解の仕方ではありますが、この件についても、筆者の思案はまだ十分にできていません。さらに熟慮を重ねて論理的な説明ができるようにしたいと思っております。